

大乘菩薩の理念と浄土教

高橋審也

1、菩薩の仏教として的大乗仏教

大乗仏教が菩薩の仏教であるということについては言うまでもない。「大乘菩薩道」という言葉もあるように、大乗仏教の修行者は仏たらんことを目指して自利利他の行を實踐する。そのような修行者を菩薩と称し、行を菩薩行と称した。それ故、インドの大乗仏教のみならず、中国・日本の仏教もまた、菩薩の仏教であると云ってよいであろう。しかし、大乗仏教がインド・中国・朝鮮・日本を通して菩薩の仏教として受容され、機能して来たかということについては、いささか疑問符がつく。例えば、日本仏教においては最澄によって、小乗律が廃され、大乗菩薩戒のみが採用され、以後日本仏教においては真宗を除く各派において出家者は概ね菩薩戒を受持し、菩薩道を歩むということになる。しかし、菩薩戒を受持したはずの我が国の出家者が、自ら菩薩の道を歩むものという自覚を有しているかということになると、いささか疑問符がつくと云わざるを得ない。菩薩戒は在家・出家両方を包摂するものであるが、在家者の菩薩戒ということになれば、ごく一部を除いて殆ど無縁であると云ってよいであろう。ここに日本仏教は菩薩の仏教としての実質を殆ど失ってしまっていると云っても過言ではない。

2、菩薩の理念の崇高性

以上のように、大乗菩薩の仏教であるはずの日本仏教において、その眼目であるはずの菩薩の存在性が希薄であると言わざるを得ないのは、「大乘菩薩道」という理念が出家者を含めた一般の仏教者にとって、余りにも崇高かつ高邁すぎると見なされてしまったからではないのか？ 観音や弥勒・地藏などのいわゆる「大菩薩」は偉大なる救済者であり、自らの到底及びぶことの出来る存在ではない。また、「大乘菩薩道」なる理想、迷いの世界に止まりながら生死を繰り返しつつ無限の時間を掛けながらも、衆生救済に邁進するという理念は、余りにも崇高かつ高邁であり、その菩薩の姿を自らに擬するという事は到底及び難いとして考えられたに違いない。

3、菩薩の理念と浄土教

大乗仏教は菩薩の仏教と言いつつも、仏教の現場では菩薩の存在感が希薄であるということは、浄土仏教に於いて特に顕著である。法然・親鸞の浄土教の信心にあつては、善導の二種深信というものが、根本にあつて、出離の縁なき罪惡深重の凡夫であるとの自覚に於いて、阿弥陀如来の絶対他力の信心が確立するということになる。この罪惡深重の凡夫にあつては、衆生救済の利他行などは実践し得るはずがないという考えは浄土教特に真宗の伝統にあつては非常に強い考え方で、今日に至るまで、強固に根を張っているものと思われる。近代仏教学の大きな業績の一つは平川彰、静谷正雄等によって提唱された「大乗仏教在家起源説」と称される学説である。この説は近年批判にさらされているが、静谷が提唱した「誰でも菩薩」という菩薩像は菩薩というものを高邁な理想的な存在としてではなく、大乗仏教を奉ずるものは、すべて菩薩で有り得るという画期的な意義を有している。三年前の東日本大震災において、仏教各派も、積極的に被災者救援に専念したが、浄土仏教各派にあつても例外ではない。本発表はこの「誰でも菩薩」という理念を手がかりに、他力仏教としての浄土教を菩薩の仏教として、即ち自利利他の仏教として意義づけようという試みである。